

1 番（上田雄一君）〔登壇〕

皆様、改めましてこんにちは。ただいま議長より登壇の許可をいただきましたので、私、上田雄一の一般質問をさせていただきます。初日から5人の一般質問ということで、皆様、大変お疲れのこととは思いますが、本日最後の質問者となりますので、どうか最後までおつき合いをいただきますようお願いいたします。

3度目でまだまだ未熟者で勉強不足でもあり、まだまだ緊張しております。ハンカチ王子ではありませんが、かなり寒くなってきましたので、前回のようにハンドタオルを用意してきておらず、ハンカチのみで汗をふくのが追いつくかどうか不安ですが、前回と同様、教育について、スポーツ振興について質問をさせていただきます。多少横道にそれるような質問になるかもわかりませんが、念のためということで、一応通告してはおりますので、よろしくようお願いいたします。

その前に一言、武雄市民の皆さん、この武雄市をよくしようと、住みよいまちになればいいなとだれもが思っていることと思います。私も、常々にぎわうまちにしたいと思っております。でも、そうするためにはお金が要ることがほとんどであり、景気回復にも地域格差が発生していること、皆さん御存じのとおりだと思います。昨今のネット時代、ネット通販などで買い物をされている方、また、大型店の進出などで、他県またほかの市町村で買い物をされている方、多数いらっしゃるかもしれません。多少なりとも、それも景気回復の地域格差をつくる一つの要因ではないかと考えるわけです。

そういう地域格差を少しでも解消するために、住みよい武雄、にぎわう武雄になるために、まず簡単に我々市民ができること、それはもう地元を大事にすることであるかと考えております。年末年始を迎えて何かと物入りになり、消費が避けて通れない時期でもあります。武雄で買えるものは武雄で、武雄の業者でできるものは武雄の業者でと、地元でお金を使い、地元が潤い、地元でお金が回ることをいま一度考えていただき、極力地元消費をお願いしたいという次第であります。

それでは、最初の質問に入らせていただきます。

まず、教育についての質問です。

昨今の学校教育の問題点については、いろいろな議論が交わされているところであり、関係の方々は大変御苦労されていると思います。また、保護者の皆様は、不安を抱えていらっしゃるのではないのでしょうか。私もまた、4人の子を持つ親として不安を持っている一人でもあります。いじめ、それに伴う子供の引きこもり、そして自殺、事あるごとにマスメディアが報道し、悲しいことにみずから命を絶っていくということが全国のあちらこちらで連鎖反動的に起こっています。また、受験優先の教育プログラムによる未履修科目問題や子供に限らず、教育現場関係者の不祥事による大人の自殺まで悲惨なニュースが飛び交い、教育の環境が崩壊するような危機にあるのではないかと考えております。

先日も、現役の学校教員が自分のホームページに非人間的な事柄を掲載する始末で、一番身近に接している先生が子供たちを裏切るような行為に、子供たちはだれを信じていいかわからないのではないかと思えるほどです。未履修科目の問題などは取り返しがつく問題ではあるかなと思いますが、命にかかわる問題、もちろんそして精神的な問題、そういったことは成長期の子供の心に大きな傷を残し、一生取り返しがつきません。

先日行われました武雄市の弁論大会に傍聴に行っていましたがいりませんが、発表している子供たちの1人が言うておりました、死ぬなんてもったいないと。私も共感するところであり、私自身、子供たちには何があっても死ぬなと言いたい。幸いにも、これは武雄市で起こった事件ではありません。どこでも起こり得る事件だと思います。

学校現場で起こっている問題について、市長はどう思われていますでしょうか。これが起きてからの対応策ではなく、未然に防ぐような予防策を考えていらっしゃるのかとお聞きしたいと思います。3番議員の質問にもありましたが、私も決して賢く頭がいい人間ではありませんので、もっとわかりやすく教えていただければと思います。よろしく願いいたします。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

昨今のいじめ問題、あるいは引きこもり、そして自殺に至るということは、私は一個一個を見れば社会に対する深刻な警告だというふうに考えています。その上で、個々の事案をつぶさに検証すると、学校の職員の皆さんであれ、亡くなった小学生、中学生であれ、一つ共通点があると思います。それは孤立孤絶化です。なぜそこに至るまでだれかが助けてくれなかったんだろう。なぜ、そこに至るまでだれかに相談できなかったんだろう。それは、我々大人社会が、すべてがそれで解決するとは思えないけど、深刻に反省する必要があると思います。その上で私は早期発見、早期対応、これに尽きるのではないかと思います。そういう意味で、私みずからも市長と子供と語る会ということで、親、地域、あるいは学校、そして我々大人世代、そして子供たち全体がつながっているんだというメッセージをそこで私は発していきたい、このように考えております。

具体的にどういう対策があるかについては、これは教育委員会がマスターでありますので、教育委員会から答えてほしいというふうに思います。

議長（杉原豊喜君）

庭木教育長

庭木教育長〔登壇〕

3番議員のときにも申しましたが、教育委員会といたしましては、まず子供たちの日々の生活をとにかく把握をする、これがまず第一であります。それで、各担任の先生方が、子供

たちと接触できる時間をなるべくたくさん確保していただきたい。これを校長会でもお願いをしたところでございます。また、子供たちの朝の担任との出会いは、その日の子供たちの表情によって一番よくわかるときでございます。また、帰りの会のときの子供たちの疲れ切った表情を見抜く力、これもまた担任教師にとっては、大変子供の心の動きというものを知るチャンスでもあります。こういうふうなことを大事にしながらやっていきたいと思えます。

また、やはり職員同士の情報交換会、これも非常に大事でございます、特に昨今のいじめ問題が大きく取り上げられましてから、各学校におきましては頻繁にこの学年、あるいは運営委員会、あるいは全校的な職員会議というところで、この会を持って情報交換をしながら進めさせてもらっているところでございます。

議長（杉原豊喜君）

1 番上田議員

1 番（上田雄一君）〔登壇〕

いじめについてですけど、以前、関係部課に実態をお伺いしに行ったことがありまして、再度確認しようと思っておりましたけど、先ほどほかの議員からも質問がありましたので愛させていただきますけど、このいじめという本当に判断しづらいというわけですね。何がいじめで何がいじめでないのかと。当事者がどうとるかによって、もう決まることもあろうかと思えますし、何も暴力的ないじめだけでなく、無視されたり、陰で悪口、またありもしないようなうわさ話を流されたりですね。また、それ以外にも、いじめる側の人怖くて言えないとかですね。もう現場は物すごいと思うんですよね。文部科学省から出されているいじめについての定義というのも私も勉強しましたが、現場はこがんふうに簡単なものじゃないかなとやなかかなと心配しさえもします。

先ほどの答弁の中で、子供たちと接する時間をもっと多くとるという話をお伺いしましたけど、実際、やっぱり子供たちもいろんな頭、知恵を使うと思うわけですね。やっぱり先生たちがおるところとおらんところ、もう先生たちが見とらんと思うところで、やっぱりそがんふうないじめもあつとるとやないかなと思うわけですけど、学校側の先生たち以外でのそのいじめの実態を調査する方法というかですよ、それ以外で実情把握する方法は何か、先生たちと子供たち以外で何か具体的な方法がこれまで実施されたかということをお伺いしたいんですけど。

議長（杉原豊喜君）

庭木教育長

庭木教育長〔登壇〕

子供たちの学校での生活も、担任教師、あるいは教職員にサインとして出せる子供、これはいち早い対応ができるわけでございますが、できない子供さん、これについては、やはり保護者の皆様方との連絡帳、あるいは子供たちが何げなく書く日記帳、こういうふうなもの

は非常に早期発見をするときの一つの目安になります。

それからまた、地域の皆さん方から、どうもあの子供さんはよう1人で帰りよんさるよというようなそういう情報、これが非常に学校にとってはありがたいことなので、そのために学校の方は平素から地域の皆さん方との連絡、あるいは御相談等への距離をどう縮めておくか、これが肝要ではなかるうかと思っております。

議長（杉原豊喜君）

1 番上田議員

1 番（上田雄一君）〔登壇〕

わかりました。

先ほど市長からの答弁の中でもありましたけど、語ろう会を開催する企画ですね。自分の体験談を交えて子供たちに問いかけることというのも大変いい試みだと思います。しかし、あえて苦言を呈すというと、市長というふうなやっぱり肩書、こういうのがもちろんつながるといのが大事というのも、もちろんわかります。子供たちがもっと市長を身近に感じるということ、非常に大事だと思います。私も子供を持つ親として、また、いろんな子供とかかわる中で、子供たちというのは結構大人になかなか心ば開きにつかところのあるとですよ。信用した人じゃないと、なかなか心を開かないと。ですから、こういう語ろう会、せっかくいい企画をしていただいておりますので、できるだけ子供たちの本音、子供たちのSOSを何とか聞き出して、市長の体験談を交えた話を材料に、市長にもじかに子供たちのSOSを感じ取ってきてほしいと、そういうふうに思っております。

それで可能であれば、今5、6年生対象というふうに話を聞いております。高学年と云わず、ちびっ子ギャングと言われるような3、4年生、こういう子供たちも、ぜひ語ろう会への参加を検討いただきたいなと思っております。

さて、本題に戻しますけど、子供たちの心の問題というのは非常に難しいもので、親にさえ悩みを打ち明けられない子供もいるわけですね。しかし、最も理解できるのは親しかいないと考えております。知人等の会話の中やインターネット、またニュースでも親のあり方がかなりクローズアップされている今日、毎日新聞社の世論調査で、いじめの原因について親のしつけが問題と考えておられる方が5割を超えるという結果で、また、昨日の佐賀新聞でも同様の結果が出ておりました。親も教育するというと少し語弊があるかもしれませんが。極端に言うと、もうかなり極端ですが、子供を育てるといふことの教育を、高校や大学の課程にあってもおかしくない時代になったのかなと思えるほどであります。親に対する教育について、現状ではどう考えられているかお聞かせ願えませんか。

議長（杉原豊喜君）

庭木教育長

庭木教育長〔登壇〕

子育ては、おんぶにだっこに肩車、こういうふうに言われます。これは、年を重ねようとも変わらないと思います。そうすることが、大人になる過程の中で自分の幼いころの親との接し方が自分の体の中にしみ込んで、次の子育てに役立っていくだろうと、こういうふうに思います。ぜひ、お父さん、お母さん方には、おんぶにだっこに肩車、こういう気持ちで子育てに励んでいただければと思います。

議長（杉原豊喜君）

1 番上田議員

1 番（上田雄一君）〔登壇〕

私は、学校と親が、また親同士が、お互いの考えや子供の接し方を意見交換してオープンにする必要があるんじゃないかなというような考えを持っています。熱心な親御さんは、しっかり勉強されておられると思うわけですね。仕事の忙しい方などでも、知らず知らずに子育てをおろそかにしがちな方もいらっしゃることもよく聞きます。もう現に、私ごとで恐縮ですけど、私も議員になってから、毎日おかげさまで忙しく過ごしております、私も当然子供たちと接する機会が減った一人であります。しかし、できるだけ私は1日1時間から2時間、少年野球の練習の手伝いに行って子供たちと接する時間を設け、その保護者の方々のいろんな意見を聞いたりして勉強する場を持つとしております。そういうことから、私は改めて教育やしつけについて、学校と家庭、地域の連携が必要だと考えます。

行政側としても、よくこういう学校、家庭、地域の連携が必要だと言われておりますけど、こうしたことへの取り組みについて、具体的にもっとお聞かせ願えませんでしょうか。

議長（杉原豊喜君）

庭木教育長

庭木教育長〔登壇〕

先般、北方幼稚園・小学校・中学校共催によりまして、いじめ問題を考えるという教育講演会をしていただきました。そのときに講師の先生は、親も教育の実践に当たる者も、今こそ勇気と想像力をつくってほしい。想像力というのは、これは思いやり、相手がこう言ったら、こう思うんじゃないかと。こういう気持ちを大いにしてほしいと。そういうところで、保護者も教職員の方も話題をお互いにつくって子供の育ちを見守ってほしいと。嫌と言える子供をつくるのも保護者であり、教職員でありますというようなお話をお聞きいたしまして、なるほどだなと思いました。

また、川登中学校校区では、このいじめ問題が大きくクローズアップされました後に、すぐさま教職員の現場研修というのを実施されまして、教育センターの専門の研修員をお呼びされて校区の小中の教職員の研修会も持っていただき、それを保護者の皆さん方に生かすという研修もなさっております。

また、先ほど山口議員の方からもありましたが、山内中学校では生徒会による人権集会の

中で、全校的な取り組みの様子を新聞等にも報道されましたように取り組んでいただき、今子供たちの回りにどういうことが起きているのか、どういうことが自分たちの課題なのかといういろいろな視点から情報を発信していただいているものと思っています。これからもそういうものを大いに現場ではやっていただきたい、また、行政としてもやっていく必要があると思っております。

議長（杉原豊喜君）

1 番上田議員

1 番（上田雄一君）〔登壇〕

私も北方の方の講演をお伺いに行きまして、チャップリンとか何かいろいろ出てきて、結構楽しく話を聞けたんではないかと思っておりますけど、私が考えるとは、学校から家庭とか、教育委員会から学校というような情報の提供は、もちろん私も保護者の一人でありますから、学校からのプリントとかそういったとばよく見て、学校からの情報というのはよくいただくわけですけど、その逆ですね。親から意見の聴取とか、親がどがん考えれば持つておるとか、そういう、例えば子育てについて今の保護者がどういう悩みを持つておるとか、我が子にどがん悩みば今持つておるとか、そういう意識の調査というのの実施した経緯はありますか。お聞かせください。

議長（杉原豊喜君）

庭木教育長

庭木教育長〔登壇〕

大変ありがたい御意見をいただきました。今まで、教育委員会としてしたことはございません。

議長（杉原豊喜君）

1 番上田議員

1 番（上田雄一君）〔登壇〕

私は、そういうのがぜひ必要じゃないかと思うわけですね。それこそが連携につながって、いじめをなくす方法として世論調査、どの報道でもいろんなことで一番多い意見が、やっぱり結局は家庭での会話をふやすということにはなるわけですね。それが40%を超えるような多い意見になるんですけど、実際家庭で保護者が悩むとなると、もちろん各家庭でいろんな会話をしますよね。そういうときに、やっぱり親である我々は核家族、私も核家族なんですけど、やっぱり子供たちと話す内容によっては自分の考えを話すということ、示すということになると思うたわけですね。

しかし、そがんしよったときに、果たしてそれが本当に正しい考え方なのかということ、もちろん私も疑問に思うこともやっぱりよくあるわけですね。3世代同居の家庭というのは、親の教師としてというか、子供の逃げ道として祖父母がおんさったと、おじいちゃん、おば

あちゃんがおんさったと思うんですけど、核家族の家庭というのはそういうのが、家庭の教育とかしつけは、もう親の考えが全部になると思うわけですね。もちろん、私を含む親が勉強すりゃよかと思うんですけど、そのための材料というか、そういう機会を行政として提供することとか、提案することというのはできんかなと思うわけですけど、その点についてどう思われますか。

議長（杉原豊喜君）

庭木教育長

庭木教育長〔登壇〕

家庭教育の充実、こういう講座と申しますか、研修会と、こういうものが非常に必要になると思います。

この辺につきましては、教育委員会にも今後どういうものが形としてできるのかどうか、今以上にできないものかどうかということで検討をし、研究をさせていただきたいと思いません。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

行政の方では子ども部をつくりますので、そこで相談窓口の一定の一本化、そして各、生まれる前から、そして幼児、小学校、中学校といったところでどういう研修とか、先ほど教育長からありましたような教室があるかということは、教育委員会とよく連携して子ども部で対応することになるかと思いません。

議長（杉原豊喜君）

1 番上田議員

1 番（上田雄一君）〔登壇〕

親は、やっぱり我が子が何より大切だと思うわけですね。学校と家庭が本音で話すというか、ひざを交えて話をするという、そういう場が必要じゃないかなと思うわけですね。その際、もちろん意見があると思います。先生方も、もう言いたくても言われんというようなこともあるかもわかりません。でも、保護者も学校内で起こる事柄も把握できて、なおかつ先生と一緒に我が子のことは考えられるて、そういうことができたなら、ほんて親も心強かと思うわけですね。

担任の先生ともなると、もう40人からの子供を受け持つわけですから、先生方も大変だと思います。おのおのの責任とか指導の方法とかもう抜きにして、ざっくばらんに話すことができれば、今までと少し違った子供とのかかわり方というのもできてくるんじゃないかなと。意見の違いとか見解の相違とか、もちろんあるでしょうから大変だと思います。でも、やっぱりそういう考えもああとかなとか、自分はこがん思うとばってん、あん人の言んさあとも

一理あもんにゃとか、今まで見えんやった部分の見えてきて、やっぱり自分のこと、また自分の子供のことは客観的に見るができると思うわけです。こういったことが学校と親との意見の交換、これがもう連携を生んで、親同士の意見の交換というのは、私は地域の連携の一つだと思うわけです。

そういうことで、口先だけじゃなし本音でないと、もう子供たちのために何もならんと思いますので、大変でしょうけど、ぜひ考えていただきたいなと。そして、先生方と保護者のパイプ役というか、先ほどの市長の答弁で子ども部でそういうことを考えていきたいということで話をいただきましたけど、先生方をフォローする、助けるぐらいの教育委員会という動きになってほしいなと思うわけです。

でも、そういう場、座談会というようなことが、もしちょっと難しいということであれば、プリントとかで学校現場の考えを提示して、保護者の考えを徴集して、また徴集した結果に対してまた、さらに学校側からの意見を提示するとか、そがんふうにはキャッチボールが必要かと思うわけです。私も、もうやっぱり仮に頭ごなしになってでもだめなものはだめだというような武士道の精神というか、そういうしつけも必要だと思うわけです。

そういう意味でも、やっぱり団塊の世代と言われる方々などの年配の方々、もう諸先輩方の話ば聞くことは私自身は大変勉強になるわけです。もう自分自身もやっぱり考えさせられるわけで、そういう方々の意見を聞けるような仕組みとか、アイデアを反映させることができるような仕組みというのも考えられんかなと。もうちょっと何でんかんでんできんやろうかでんきんやろうかと言いよおですけど、結構不可能なことがあるんなら、ちょっと不可能というふうにお聞かせいただければと思いますけど。

議長（杉原豊喜君）

庭木教育長

庭木教育長〔登壇〕

これまでも可能な限り保護者の皆さんと現場とのパイプをつなぎ、太くすると、こういう姿勢はしてきたわけですが、こういう子供を取り巻く環境の激変と、しかも生きるという根本にかかわるような問題が入ってまいりますという、ますます襟を正して頑張っていかなければならないと思います。

議長（杉原豊喜君）

1 番上田議員

1 番（上田雄一君）〔登壇〕

私も2回小学校の入学式を経験しておりますわけで、2度とも私自身が参加したわけですが、その2回で最も心に残っておることが、家庭で絶対に先生の悪口を言わないでほしいと。不満や矛盾など生じたら直接学校へ言うてくれというふうに言われたこの一言が、私ずっと頭に残っておるわけです。

言いたいことは、やっぱり子供たちは惑わさんでほしいとか、先生を信じてほしいと、いろいろな意味があるんじゃないかと思うわけで、思い起こす、おいどんの時代は熱血先生の結構おんさったと思うとですよ。今の時代なら暴力と言われてしまうこともありましたけど、それを暴力で感じたことはなくて、家に帰ったら親もあんたが悪かけんやろうもんと言うて、逆に倍以上やかましゅう言われて怒られよった、そがんふうな時代やったと思うわけですよ。しかし、それによってだめなことばだめと言うような規律を守るといふか、約束を守るといった大切なことば学んだような記憶があるわけですよ。怖い先生やったばってんが、何かその先生の前に行くぎ素直になれたような感じがしよったがなと、そういうふうな感じさえ覚えています。

そういう先生がいる、いないというのは大きな差があるんじゃないかと思うわけですが、ちょっと最近のマスメディアの話を見よって、先生の社会的なポジション、こいが何か大丈夫かなと逆に心配するわけですね。子供たち、先生ば敬うどころか軽んじてしまうっちゃんかかなと。先生も、もうやっぱり何か、我が勉強ば教える人だけになってしもうて、心の教育というのはほど遠いものになるんじゃないか。逆に、どがんやって自分の生徒と接するのから先生が悩んでしもうっちゃんかかなと思うわけですよ。

私は、我が子にどがんしてでん理解させなければならんとか、伝えなければならんと思うとき、言葉でわからせることができないことが我が子でもあるわけですね。自分の子でもそがんなのに、学校の先生というのは他人の子ば、しかも1人、2人じゃなし、大勢の子供を教育、指導せんぎいかんと。そいばってん言うこと聞かんぎ、反省さすつために廊下に立たせたら体罰とか、グラウンドば走らせても体罰といふか、何か余りにも過保護過ぎて何が体罰で何が指導なのかようわからんような状況ではあります。今の環境でどがんやって教えんさあとやろうか。言うて聞かん子は、もう放置するしか方法なかとやなかかにかというごたあ心配すら覚えるわけですよ。

先生の質が問われている今、新しい試みが必要だと言われておりますが、これも難しい問題であり、また賛否両論あると思います。すべての先生がそがんじゃなかけんですね。中には一生懸命子供たちのために奮闘されている先生もいらっしゃるでしょう。だからこそ学校の現状ば知ることは、各家庭での教育、しつけを行う上で貴重な材料になって、家庭の現状を知ることは学校で教育指導を行う上で貴重な資料になると思うわけですよ。

これだけ先生に対するバッシングといふか、そういうとがある中で、なかなか子供たちに真剣にやっぱり考えているといふか、思いといふか、伝えられない先生のストレスが間違った方向に向いてしもうて、信じられん事件まで巻き起こっているんじゃないかと感じるところもあるわけですよ。現場の実態として先生たちの意識、この辺はどうなんでしょうか。お聞かせ願えたらと思っております。

議長（杉原豊喜君）

庭木教育長

庭木教育長〔登壇〕

人の一人一人の顔が違うように、教職員の心の持ち方というのも、また違うわけでございます。

しかし、子供たちに何か一日の生活の充実感を味わっていただこうと、この思いは、個人差はあっても教職員は全部持っているとは私は信じて、これからも先生方にそういうことで頑張っていただくようお願いをしていきたいと思っております。

議長（杉原豊喜君）

1 番上田議員

1 番（上田雄一君）〔登壇〕

その一言を聞いて安心しました。

関連して、武雄市の子供たちというのは、今、大きな岐路に立たされていると思うわけですよ。教育環境が大幅に変わろうとしておりまして、高校再編、中高一貫、ただでさえ教育がクローズアップされている中で、この教育環境の大きな変化というのは、これまで以上に武雄でとんでもないことが起きるんじゃないかという危機感を持っている方が多くいらっしゃいます。各地で相次ぐ悲惨な事件が武雄でも起こるとやなかやと。その危機管理もお忘れのないように、くれぐれもお願ひしておきます。

中高一貫の件ですけどね、高校再編というか、どちら、同じ問題じゃないとですけど、武雄に中高一貫ができるという中で、先日、私の子供が通う小学校でPTAの広報部からアンケートがあったわけですよ。

その中で、県立中学校の情報として、今、情報提供として満足できるかというようなアンケートの項目があって、それに対してやっぱり不十分と答えた保護者がかなり多いわけですね。回答のおよそ8割が、もう不十分で。やっぱり県内、県立とはいえ、市内の子供たちにかかわる問題ですから、県の情報提供が不足しているなら、そいば吸い上げて市として情報は提供してやるとかですね。やっぱり市内の子供たちのためやっけん、子供たちというか、子供を持つ親ももちろんそうですけど、市のホームページにリンクを張るとかですね。もうやっぱり今のインターネットの時代で、簡単に情報ばとれる時代やっけんが、せっかく市にもよかホームページのあもんやっけんですね、そういうことは、ぜひ考えてくれというようにして申し上げてきましたけど、残念ながら実施には至っておりませんでした。これ、なぜできんやっけんとかというとは、ちょっと一言、教えていただければと思います。

議長（杉原豊喜君）

庭木教育長

庭木教育長〔登壇〕

なぜできなかったかという前に、実は新設の県立武雄高等学校、それから県立青陵中学校、

これはホームページにリンクができるようになりました。どうぞ皆様方、見てください。

議長（杉原豊喜君）

1 番上田議員

1 番（上田雄一君）〔登壇〕

済みません、それはいつですか。もう私も再三言ってできなくて、しかも先週末には、もう応募締め切られとおわけですね。それも済んでから情報を出してもろうても、なかなかちょっと何もならんや、もちろん何もならんじゃなかですよ。やっぱり、せっかくホームページは有効に活用していただき、その場その場の対応じゃなく先先を見据えた情報提供を、この場をかりて再度強くお願いしたいと思います。

それでは、先ほどの子ども部に関連して、ちょっと一つ。

子育て支援センターのような部課が必要だというのは、前回の議会でも話しました。市長も賛同いただいたわけで、いろんなことを積極的に今動かれておるような状況であります。

私が思うとは、せっかく子ども部ができるのであれば、全国の子育て支援センターのような、いろんな例にあるようですが、広かスペースやなくても子供たちには楽しく遊べるおもちゃなど用意して遊ばせながら親同士の交流が図れるような、そういうスペースを隣接させることができないかと思うわけです。狭い本庁の中で厳しいかもわかりません。

しかし、そういういろんな申請とか手続とか、相談の窓口を一本化するということであれば、子供ばだっこしてきてても、子供ばうだいたままずっとそういう手続とかしようぎんた、やっぱりうだいとう方は、やっぱりもういらいらいらしてくるわけですよ。ばってん、自分の子供は、やっぱり手ば離しとうなかわけですよ。そいぎんた、やっぱり用事ば早う済ましゅう早う済ましゅうというとの時間のかかっていくぎ、だんだんだんだんいらいらいらしてくると。そいけん簡単に、じゃできんなら、やっぱり子供ば目の前で遊ばせよるといようなことであれば、親もゆっくりゆとりを持ってそういうことにじっくり相談もでき、時間をかけられると思うわけですよ。

そういうことで、親とか子供が、やっぱり来やすいように、また、そういう手続がしやすいように、そういう子供たちをちょっと遊ばせる簡易的なスペースというか、そういうのが隣接できないかお聞きしたいのですが、お聞かせください。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

子供が親とともに遊ぶスペースについては、今のところ最低二つを考えています。

一つは、北方に置く子育て総合支援センター、この中に何らかの遊具を置いて子供たちが親と一緒に遊んで、親が親同士の交流ができるようにすると。それと、もう1点が本庁であります。本庁については、常々不思議に思いよったとは中央公園ですね。あそこで何で人が

おらんやろうと。よくよく考えてみれば、物すごく木があってなかなか外から見えん構造になっておるわけですね。ちょっと公園の整備を、今事務方をお願いをしています。その上で、あそこがもう少し遊べて、周りから見れるようになって、そのとき、先ほどあったように、いろんな手続とかというのは、そこで遊んでもらいながら何らかの交流室を、ちょっと大きいか小さいかは別にして、庁内の中に置くか、ちょっと外の張り出しにつくるか、それは今検討を進めています。

どちらにしても、今後の機構改革と先ほど言った中央公園の話、そしてその子育ての交流スペースについては、今庁内で一生懸命検討をしてもらっております。

議長（杉原豊喜君）

1 番上田議員

1 番（上田雄一君）〔登壇〕

今の答弁を聞いて安心しました。やっぱり市民にとってよりよい仕組みを考えて、ぜひ市長のこれからの手腕にも期待しておりますので、どんどん情報を提供していただきたいと思えます。

それでは、スポーツ振興について質問させていただきます。

財政難を浮き彫りにするような話ばかりで非常にやりにくいんで、もう心苦しいんですけど、市民の皆様の声ですので、質問をさせていただきます。

振興といってもいろんな振興がありまして、このたびの群馬県に決まりかけていたがばいばあちゃんですが、市長のトップセールスにより、誘致成功に至っては大変な御尽力だったと思います。市民の皆様の支援、協力も相なって無事に終了することができました。

そこでお伺いしますが、さきの議会においてがばいはきっかけであるとおっしゃっていました。情報発信であり観光であり、市民の誇りであると。一石三鳥であり、その一石を投げたとおっしゃっていましたが、このがばいを今後どうしていこうと考えておられるか、お聞かせいただければと思いますが。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

がばいについては、ちょっとこれもとらぬタヌキの何とか算用ですけれども、視聴率がうまくいったということを前提にお答えしたいというふうに思います。

一つ目が、がばいが成功して、これをうまく観光に結びつけていきたいというふうに思います。市内で25カ所の口ケがあったところであります。風景と建物を建てた、合算して25カ所。これをうまいぐあいに観光コース化にして、これを売り出していきたいというふうに思っております。あわせて、「北の国から」にこれは倣って、佐賀のがばいばあちゃん資料館を、ちゃんと入場料を取ってやっていただくところを今探しております。

そういう意味で、「北の国から」方式に倣って観光客をふやしていきたい。そのときに夕張市のごとですね、あいもこいもつくって結局、市のつぶれたというふうにならないように、きちんと財政の規律を見ながらやっていきたいというふうに考えております。民間の力をうまく、私が中心となって引き出していきたいというふうに考えています。

それによって、外からもっと目を向けると。私が去年武雄に帰ってきて、これは私個人ですけれども、そのときのブログのアクセス数と今の私のブログのアクセス数は、30倍から40倍、もう開きがあります。そういう意味で、武雄に対する関心が物すごく深まっています。だから、そういう意味でのがばいがきっかけになっていることは、もう今でもなっております。それを、今度はもう少し具体化して行っていかんばいかんというのは思っております。

その上で、市民の皆さん、議会の皆さんにお願いですけれども、私、あるいは市役所ができるのはここまでですね。だから、あとはこのがばいばあちゃんを何とか商品に結びつけるとか、あるいはビジネスチャンスに持っていかるとか、そういうブランドづくりというのは民間の方々にぜひお願いをしたいと。そのための後押しというのは、惜しみなくやろうと思っております。

そういう意味で、きっかけにはなりますけれども、もっと武雄はイコールがばいだというふうになるぐらい徹底せんぎ、私はだめだと。どこもかしこも、今、ドラマ誘致、映画誘致しています。うまくいっているところ、うまくいっていないところの境目は何かというと、徹底してやっているかどうかです。中途半端にフィルムコミッションをあつくりましたといっているところは、もうだめです。

しかし、香川県の「UDON」であるとか、「世界の中心で、愛をさけぶ」でしたか、あるいは「北の国から」もそうです。そういったところは、本当に行政と民間、そして議会が本当に、もうタッグを組んで一生懸命やっております。この徹底さが、武雄において徹底できるか、あるいは佐賀において徹底できるか。これは、私は一つの試金石だというふうに思っています。私は、もとよりきっかけを投じたにすぎませんので、これから先は、本当に市民総意、あるいは佐賀県民総意でこれを盛り上げていただければありがたいと。そのために、視聴率を何としてでも関東20%、とらねばならぬというふうに思っております。

議長（杉原豊喜君）

1 番上田議員

1 番（上田雄一君）〔登壇〕

市長のがばいに対する思い、よくわかりました。

私は、もちろんスポーツが大好きでありまして、市長も常々オール武雄で頑張ろうとおっしゃっておいりましたし、オール武雄というスポーツのチームのような感覚になるわけで、スポーツに例えて質問をしたいと思えます。

いかなる団体競技にも言えることであり、種目は何でもよかんですけど、市長は朝日町少年野球団のOBでもあられますし、私も武雄町スポーツ少年野球団のOBでもありますので、野球に例えて言いますと、野球というのは、言わなくてもわかるとですけど、打線で攻撃し、得点をねらいますよね。まちづくりを打線として考えるとすると、出塁してランナーを帰して得点するために1番から9番までそれぞれ役割を持った打者がいて、ベンチも代打がおるわけですね。その打線で言うと、がばいは何番打者で、どういう役割を持っていると考えられておりますでしょうか。お聞かせください。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

野球で例えて言うと、僭越かもしれませんが、1番バッターだというふうに思っています。うまく出塁をしたものだというふうに。これは、いろんなラッキーな要素がありました。何か、こうフライが上がってきてぽこっと落としたりとかですね。敵があって、うまく出塁をして、今度それが盗塁をできるかどうかうかがっているところというところだと思います。

だから、これから先は市民の皆さんたちが、野球で例えるならば2番、3番、4番と。おいが2番バッターになあばいと、私が3番バッターになるんだというような迫力と気概を持って1番バッターを無事ホームに帰していただいて、どこの市にも負けないようなチームになっていければいいなというふうに思っています。

議長（杉原豊喜君）

1番上田議員

1番（上田雄一君）〔登壇〕

1番打者ですね。私も、ちょっと考えが一致するところがありまして、がばいというランナーを今度どがんで帰していくか。もちろんさっきも答弁で出ましたけど、2番バッター、3番バッターはおいがおいがというような市民の盛り上がり期待しているというふうな話ですけど、やっぱりがばいによってランナーはもちろん出塁しました。もう大成功やけん、もちろん出塁しておわけですけど、積極的な活用で、やっぱり効果を上げられている企業は、もちろん一部ではありますけど、まだまだやっぱりそこが足りないと考えられていると思うわけですね。まち全体でもっとがばいを利用してもうかってほしいと考えられていると思うわけですけど、でも、なかなかその一歩踏み出せないでおられる方もいらっしゃるんじゃないかなというのが、結構おると思うわけですね。

その一歩踏み出すためには、そいぎ次の打席に送る打者、次の1手、次の施策としてどがんでんふうなことが考えられているか、お聞かせ願えますでしょうか。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

あくまでも担い手は市民であったり、企業であったりすると思います。しかし、私はこいば呼んできた責任がああわけですね。議会の皆さんたちに一生懸命お願いをしました。それで、議会の多くの皆さんたちから御同意をいただいて、ここまで育ってきています。そういう意味では、私は非常な責任を感じています。

そういう意味で、私はこういうことを思っているんだといったことは自分のホームページ、あるいは市報とか、あるいはこういった議会の場でどんどんアピールをしていこうと。それで、市長の言いようことは、これは自分はいけるねというような賛同者の輪をもっと広げていきたいなというふうに思っております。そういう意味での私の責任は大なるところがあるというふうに思っておりますし、一つの案として「佐賀のがばいばあちゃん」をどうビジネスに結びついて、我々としてはどう税収をふやすかといったことについては、私もいろんな場にこれから出ていこうというふうに思っています。

先般、青年会議所のビジネスコラボがあって、私はこういうふうにビジネス展開を考えていますというふうに申し上げたところ、あれは、その後、結構いろんなメールが来ました。自分たちはこういうふうに考えておるとか。しかし残念だったのは、唐津とか伊万里とか鳥栖とか、そがんとこばかりやったですね。だから、せっかく武雄であったけん、武雄の皆さんたちが真摯に考えられて、それでこういうふうにしていくんだということを、ほかの自治体ができる、ほかのＪＣができる武雄ができんというのは絶対に思いません。だから、そういう意味での奮起を促したいというふうに思います。

議長（杉原豊喜君）

1 番上田議員

1 番（上田雄一君）〔登壇〕

武雄のＪＣは、市長を身近に感じておるわけやけんが、やっぱりその分、身内身内ではとどんどんどんどん活性化、活発な意見は出よるとですけど、それを身近に感じておるがゆえに市長に届いてないというのはあるかと思えますんで。

先ほど話の中で、やっぱり打線の話をする、私の考えをちょっと述べさせてもらおうと、がばいは私も1番打者であると。高い確率で出塁してくれるチャンスメーカーであるというふうに思うわけですよ。そいぎ、4番打者、つまりチームの顔であって中心とされる看板打者、こいは私は温泉だと思わけですね。最も頼りになり、信頼できるバッターであってタイムリーも打ってくれると。そいぎ、そこで1番のがばいですけど、どんだけいいバッターでも、やっぱり10割は打てんわけですてね、イチローでも4割程度しか打ち切らんと。そいぎ今、がばいが何割打つかというと、それはちょっとはつきりは私もわかりませんが、イチローもやっぱり年齢重ねていくと、とどんどんどん打率も下がっていくとやなかかなと

思うわけですけど、もちろん年齢とともに努力が必要になるわけですけど、そこで私は重要になるのは2番打者を考えるわけです。

そこで私はスポーツと思うわけですよ。がばいと並んで集客のきっかけにもなるし、がばいとスポーツの1、2番打者がどっちも出塁とか、もしくはどちらか出塁で中軸、温泉に回すと。1点とれるかとれないかの打線が1点は確実にとれると。ひょっとするぎ2点、3点とるっかもわからんというような考えを持つわけですよ。

言い方を変えると、これまでの武雄というのは、やっぱり温泉という柱があったわけですよ。その柱にがばいという柱が加わって、そして、さらにスポーツという柱が加わるとまち全体の背中を押すことができると、確かな効果が期待できると考えるんですけど、いかが思いますか、お聞かせください。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

その武雄チームも、なかなか貧乏で、よかグローブとかバットとかなかもしれません。そういう意味で、1番ががばいだとすると2番がスポーツだということについては全く同感です。それで、2番がどういうふうにするかですね。だから、ここでバントをするか、あるいはもっと自分で打つか、それについてはいろんな意見をお聞かせ願えればありがたいというふうに思っています。

議長（杉原豊喜君）

1番上田議員

1番（上田雄一君）〔登壇〕

今の答弁を聞いて安心しました。そうすると、やっぱり武雄市では競技としてのスポーツを誘致するには、やっぱり施設が必要になるわけですね。もう多額の費用のかかるけんがですね、もうさきの議会でも話しましたので、もうあえて申しません。

しかし、そういうまちづくりがやっぱり必要になると思うわけですよ。やっぱりバントじゃなくてエンドラン、ヒッティングですね。あるプロ野球選手に言わすぎ、やっぱり何で武雄にちゃんとした球場ばつくらんとやと。もうせっかく交通の便のようして温泉もあって、繁華街もあってと。もったいなかなので。箱物は敬遠される時代やっけんがしようのなかがわからんばってん、必要なものはちゃんと必要なものでちゃんつくらんぎいかんとやなかねて。球場さえああぎ、選手なんかそういう情報早かけん、黙っとっても人集まるとにと。もうドームつくらんね、ドームで。もうドームの話が出たときは私もびっくりしましたけど、新鮮な意見を聞いたなと思っております。

ちょっと武雄じゃないですけど、嬉野にちなんでちょっと話を紹介しますとね、今度、社会体育館の建設を予定されておるわけですね。ちょっとある人から聞きましたら、目に見え

る合併効果というか、合併特例債のうちの30億円を嬉野町、塩田町、両町の夢をかなえようということで15億円、15億円というようなふうに計画案があるそうです。その中で塩田町は全額投資して社会体育館の建設を予定されているという話を耳にします。

柔道でいえば、柔道人口も上昇しており、武雄市には残念ながら満足するような武道場が、山内には1カ所ありますけど、なかなか日々の練習場を確保するような状況でも厳しいと。山内のその武道場も、大会を誘致するというほどのものではないと。白岩体育館で柔道大会を開催しても、以前行われたそうですけど、狭いために参加者も大変嫌な思いをされて、もうこういうもろもろの事情はもうすべて御存じだと思います。

競技としてスポーツを考えた場合、武雄の施設は満足のいくものじゃないと。6月議会で答弁もいただきました。武雄は、既にもうスポーツを競技として行う場合、いろんな障害もあるんじゃないかなと、もう障害になっておるといような状況に思うわけですよ。そういうことを、ぜひ市長に絶対伝えてくれと言われました。市長にも、そういう市民の皆様の声で、もう結構多数届いているんじゃないかと思えます。そういう施設の新設を、観光客も減少しており、嬉野も決して豊かな自治体ではないと思っておりますけど、なぜ嬉野にそういうことは積極的に動けて武雄にできないのか、お聞かせください。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

胸の痛む思いで先ほどの悲痛な質問を聞いておりました。嬉野の場合は、他市のことをどうこう言うつもりはありません。しかし、嬉野の場合、合併特例債ば使って、そういう大型の体育館をつくるということになると、それによって犠牲になるものがあるわけですね。これは別に嬉野市でも、伊万里市でも何でもそうです。それは、私は市民の総意だというふうに思っておるわけです。

幸い、ケーブルワンは多くの方々が見ておられます。上田議員が前回質問をされて、つくるべきだという意見も多数寄せられました。あわせて、つくるべきではないという意見も同じように寄せられています。そのお金があったら、自分たちの福祉とか子育てに回してほしいと、もう箱物は要らんという意見もやっぱりああわけですね。市長としては、最大公約数的に何が限られた財源でできるかといったことを、やっぱり考えなければいけないというふうに思っております。私は、市民総意としてほかのものを犠牲にしてまでも、そのスポーツの施設をつくるということが合意ができる、あるいは議会の総意になるといったことに関して言えば、最大限尊重はしようと思っておりますけれども、今、上田議員がこういうふうに私にたびたび質問をされて、私はよかきっかけになっとおと思います。また、私のところにはきょう以降、いろんなメールなり電話がかかってこようかと思っておりますので、そういう意味で、どんどんやっぱり継続は力なりというふうに思っておりますので、スポーツも議会もそ

ういったことを申し述べたい。

そして、一つ私が申し上げたいのは、フットサルは何とかできんかなと。フットサルは大きな施設とかあがんと要らんわけですね。だから、フットサルを呼び込むような手だてができる。これは、一番私にとって現実的な話かなというふうに思っつけんですね。そういう意味で、フットサルの例えばキャンプ地であるとか、試合会場であるとか、そのためにここが足りないということに関して言うぎんた、まだどこもしらんわけですね。（「サッカーの小まかとね」と呼ぶ者あり）サッカーの小まかとです。そういう意味で、フットサルを振興して呼び込むということができないかなというのは、きょう実は考えたことでもありますので、ぜひ私に、そういうJCを通じてか、上田議員から私の方に寄せていただければ、また私は動きますので、よろしくお願いしたいと思います。

議長（杉原豊喜君）

1 番上田議員

1 番（上田雄一君）〔登壇〕

私も、市民の皆様から多数そういう声が届いておりまして、3度目ということで、またそういう質問をしたわけでございます。

やっぱりスポーツ施設をつくるとなると、やっぱり県西部地区発展と、県全体の中でもスポーツは西部地区というような構図も生まれて、古川県政も自信持って佐賀県の西部地区はいやしと文化をスポーツを通して提供できるというような、やっぱりテーマができて集客の増大とか、新幹線効果をかながみても大きなプラスになると考えております。

私も、夕張市のニュースもやっぱりよく見ます。びっくりするごとあいもこいもつくっとなさあわけですね。ここまですっやということ、それは私もびっくりしました。あれもこれもじゃ、もちろん武雄も二の舞でしょう。

今回、やっぱり私もスポーツばかりじゃありませんけど、毎度毎度、スポーツスポーツと言ってスポーツのことだけ考えておるわけじゃなかわけですよね。もちろん、私を含めて市民の皆さんにとっては福祉の充実というのは、もう必要なことであり、どちらも最優先課題だと思います。今の武雄には金銭的な余裕がありません。もう何度も言うようですが、もう皆さんの説明で皆さんも大分暗い話ばかり、暗い雰囲気ばかりになっておると思いますけど、私はもっと明るくなるような、にぎわうまちになるようなことを考えていきたいと思いますので、そのフットサルの件にも関して、もう私も含め個人的にそのプロチームの関係者の方ともちょくちょく、ちょっとお会いして話をお伺いしております。そのためにも、やっぱり綿密な計画を立てて福祉の充実を行うために外貨を獲得する仕組みを考え、また行い、お金が回る仕組みをつくるのがやっぱり必要かと思うわけですよ。もう単に福祉だけの充実というふうに目ば向けておっぎ、5年後、10年後、もう今度はにっちもさっちもいかんばいと、首も回らんばいとというような状況になると。そいけん、税収を上げるための投資

というか、それももちろんで、生活環境改善のための投資、このバランスがやっぱり必要かというのは私も重々承知しております。

先見の明を持つ市長でありますので、新しいことに取り組み、新しい風を起こすことが我々若い者に期待されているものだと言われますし、感じます。市長には一日も早い勇気ある決断を期待しながら、お願いして、私の一般質問を終わらせていただきます。ありがとうございました。